報告Ⅱ　　橘堂晃一「西ウイグル国の仏教」

三谷：　それでは続きまして、当研究センターの博士研究員であります、橘堂晃一先生よりご発表をいただきます。講題は「西ウイグル国の仏教～弥勒信仰を中心に～」でございます。それではお願いいたします。

橘堂：　ただいまご紹介にあずかりました橘堂でございます。宮治昭先生、吉田豊先生とご一緒に発表させていただくことは、大変光栄ではございますが、少し私には荷が重いように感じているところでございます。どうぞお手柔らかにお願いいたします。

本日のテーマは「中央アジアの仏教と異宗教の交流」ということでございますが、私は「異宗教」には全くの門外漢でございますので、宮治先生の後を承ける形で、弥勒信仰がどのように遊牧民に受容されていったかということを考えてみたいと思っております。

一、突厥と仏教

そもそも草原世界への仏教伝来について物語る史料といたしまして、『隋書』突厥伝や『北史』突厥伝がございます。それによりますと「北斉に慧琳という仏僧がいたが、捕えられて突厥に入っていた。そして佗鉢可汗に、斉国の富強は、みな仏法があるためだと言い、十二因縁経と因果応報の理を説いた。佗鉢可汗は、それを聞いて信じるようになり、一つの伽藍を建て、北斉に使者をやって浄名・涅槃・華厳などの経典と十誦律とを求めさせた。佗鉢可汗自身も斎戒し、塔をめぐって修道し、中国内地に生まれなかったことを残念に思ったという」と伝えられるのが最初の史料のようでございます。また『続高僧伝』にも同じく他鉢可汗のところにガンダーラ出身の僧侶、闍那崛多が滞在していた、とも記されています。

これらの記録と関連する資料といたしまして、モンゴルのブグトに立てられていたブグト碑文が特に注目されます。この碑文にはソグド語とともに、ブラーフミー文字が刻まれています。吉田豊先生のご研究によると、ソグド語面は「教法の石を立てること nwm snk' 'wst」という言葉が読み取れ、それはこの碑自身を指すと考えられています。そしてブラーフミー文字の面は、文字が不鮮明なため、単語を把握することすら困難な状態のようでございますが、どうやら縦書きであるらしい。インド起源のブラーフミー文字は本来横書きです。吉田先生は、これは遊牧民にも理解しやすい『十二因縁経』であった可能性があると推測されておられます。確かに北涼時代の奉献塔には『十二因縁経』に関連する経文が刻まれているものが多数発見されていますし、そのうちの一点はブラーフミー文字のものも含まれています。

また七世紀前半、西突厥の牙庭である千泉を訪れた玄奘は、葉護可汗に対して十善・命あるものを慈しむこと・波羅蜜・解脱するための業を説いたといいます。このように遊牧民に対してごく基本的な仏教のエッセンスが可汗に説かれているという事実から、突厥の人々に対する仏教の浸透の程度は表層的なものにとどまっていた、と考えるのが妥当ではないかと思います。ちなみに玄奘から教えを聞いた葉護可汗は、手を挙げて額を叩き歓喜して教えを信受したと伝えられています。

これらは受け皿としての遊牧民が仏教と接触したことを示す資料です。西突厥が東西トルキスタンのオアシス世界にも政治的、経済的、文化的影響力を及ぼしたことを考えますと、オアシス都市国家に浸透していた仏教文化が遊牧文化の受け皿ともなったと想定することもできるのではないでしょういか。そのことを示す資料といたしまして、キジル石窟マーヤー窟、現在の第224窟、ここに描かれた壁画をご紹介したいと思います。

マーヤー窟は、いわゆる中心柱窟の構造をもち、その奥壁に涅槃図が描かれています。その対面する壁面には、釈尊の入涅槃を嘆き悲しむ人々の姿が描写されています。両手をあげる人、髪をかきむしる人、胸を叩く人、あまりの悲痛に耐えきれず卒倒する人を見ることができます。これらの姿に交じって、右から２人目と左から３人目と５人目の人物が、ナイフで自らの顔を傷つけているのがご覧いただけるかと思います。宮治先生の著書『涅槃と弥勒の図像学』でも詳しく取り上げられましたように、死を悼む表現は『涅槃経』などとよく一致するものの、顔を傷つけるという表現は、白法祖が翻訳した「涅槃経」にだけ出てくるとのことでございます。



キジル第3区マーヤー窟（第224窟）

ナイフで顔や身体を傷つけて死者を追悼する行為、漢籍史料ではこれをリ面といいますが、これは古くはスキタイから認められるように、遊牧民に特徴てきな習俗でした。例えば『周書』突厥伝には追悼儀礼について、このように言っています。

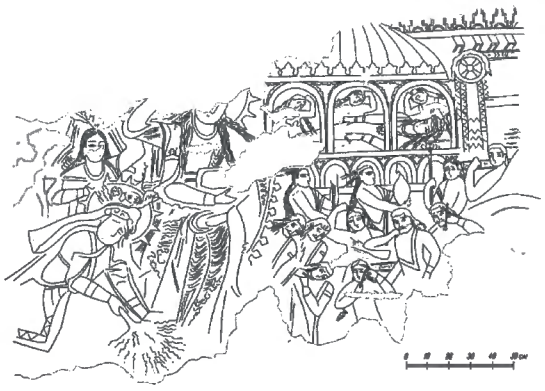
死者があると、その死体を天幕内に置いて、子孫ならびにもろもろの親族の男女が各々羊馬を殺して天幕前にならべ、お祭りをする。天幕のまわりを七回馬を走らせてまわり、一度入口の前に来るたびに刀で顔を傷つけて泣く。血と涙が一緒に流れるが、このよう

にすること七回でやめる。日を選んで、死者の乗馬やふだん使っていたものを死体と一緒に焼く。その残った灰をとって、時を待って葬るのである。春夏に死ぬと、草木が黄ばみ洛陽するのを待ち、秋冬に死ねば、花が咲き葉がしげるのを待って、はじめて穴を掘って埋める。葬式の日には、親族のものがお祭りをし、馬を走らせたり顔をきずつけたりすることは、死んだときのやりかたと同じである。葬式が終わると、墓所に石をたて、墓標もつくる。その石の数は生前殺した敵の数に応じてたてる。またこれを祭るのに、羊馬を全部の墓標にかける。そしてこの日には、男女みな着飾って葬所に会するのである。そこで男は気に入った女ができると、帰ってからあらためて使いを立て贈り物をもってその父母に頼む。普通はうまくいく。(『周書』突厥伝)

私は、マーヤー窟の表現は突厥、それも西突厥の影響ではないかと推測しています。マーヤー窟の壁画が描かれた年代は、ヴァルトシュミットにより 600 年～650 年という指標が与えられています（Waldschmidt 1933)、さらにこの年代が、西突厥が強盛を誇っていた時期ともちょうど重なることなどが、私の推測のささやかな根拠です。もしかすると右から２番目の結った髪を後ろに垂らしている人物は、実際に突厥人を表現しているのかもしれません。また突厥とオアシス国家との関係について記した『旧唐書』の記述も参考になります。

統葉護可汗は、勇にして謀あり。攻戦を善くし、ついに北は鉄勒を併せ、西は波斯（ペルシア）をふせぎ、南は罽賓に接すれば、ことごとくこれに帰す。控弦は数十万、西域を覇有す。旧の烏孫の地に拠るに、また庭を石国北の千泉に移す。其れ西域諸国の王はことごとく頡利発を授けらる。併せて吐屯一人を遣わしてこれを監統し、その征賦を督せしむ。西戎の盛なるや、いまだこれあらざるなり。(『旧唐書』巻 194 下　突厥伝下)

このように西域のオアシス国家の国王には、突厥からイルテベルという称号が付与されていました。また、トルファンでは中国とは逆に襟を合わせる被髪左衽や父兄が死んだ場合に、子弟がその妻を娶る習慣、これをレヴィレート婚といいますが、これら突厥の習俗が強要されていたことがわかります。この他にもソグド地域のペンジケントの壁画や敦煌莫高窟の壁画にもナイフで顔を傷つける姿が描かれていますが、これらも突厥の影響なのかもしれません。



ペンジケント第２址出土壁画

それでは、マーヤー窟の造営に西突厥の人間が関わっていたと考えることは可能でしょうか。私はこの問い対する明確な答えを用意できていませんが、先ほど申し上げましたように、突厥に仏教が伝えられていた事実を考えるならば、その可能性を完全に排除することはできないように思います。突厥とクチャのいわゆるトカラ人との間で、さまざまなレベルでの文化接触があったことは確かです。例えばフランスのピノー氏は、日天、月天の表現におけるトカラ語とチュルク語の関連性を指摘されておられます。このような仏教とシャーマニズムとの交流、これをシンクレティズムと言ってよいのかわかりませんが、これがあったとしても何ら不思議はないと思います。

二、西ウイグル国における弥勒信仰の諸相

744 年、突厥の後をうけてモンゴリアの覇者となったのはウイグル（回鶻）です。この時期のウイグルに仏教徒が存在していた痕跡は認められていません。仏教よりもむしろマニ教が王族の支持を得て国教としての地位を確立していました。

840 年、モンゴリアの故地を追われて、東部天山山脈に安住の地を見出したウイグル人たちは、すでに成熟した固有の仏教文化を持っていたトルファンやその周辺オアシスの仏教文化と接触いたします。やがて彼ら自身もマニ教徒よりも仏教徒の数のほうが数を増して行き、そして様々な特質を持つ仏教文化を形成するにいたります。とりわけクチャ（亀茲）、カラシャール（焉耆）そしてトルファンを中心とする地域に根差していたいわゆるトカラ仏教、そして 3 世紀以来トルファンに定住してきた漢人の間で行われていた中国仏教など、ウイグル仏教はこの二つの仏教から大きな影響を受けて発展していきます。私の専門であります写本研究の観点からいえば、トカラ語仏典と漢文仏典をウイグル語に翻訳した経典から読み取ることができます。初期のウイグル語仏典のなかには、『マイトレーヤ・サミティ（弥勒との邂逅）』や『ダシャカルマパタ・アヴァダーナ・マーラー（十業道の比喩譚の花輪）』のようにトカラ語から翻訳されたものと同時に、『天地八陽神呪経』など漢文仏典からの翻訳された経典もあります。とくに『天地八陽神呪経』の表現の中にはマニ教の影響がみられるということが、小田寿典先生により指摘さ

れています。またベゼクリク石窟の誓願図に見られるような宝石類によって荘厳された、いわゆる「飾られたブッダ」の表現もマニ教の影響ではないかとの指摘もございます。それは同じ誓願図「燃灯仏の授記」をテーマとし、同じ構図を持つクムトラ石窟（窟群区第34窟）の壁画とベゼクリク石窟の壁画とを比較したときに、ブッダ表現の差異が明らかとなるのではないでしょうか。



ベゼクリク石窟誓願図



クムトラ石窟誓願図

スクリーンをご覧ください。左がベゼクリク石窟の誓願図。右がクムトラ石窟の誓願図です。どちらも燃灯仏授記をテーマとしています。両者ともほぼ同じ構図ではありますが、クムトラの燃灯仏は装飾を一切身につけていないのに対し、ベゼクリクの方では様々な瓔珞を身につけているのがおわかりいただけようかと思います。入澤先生は、ここにマニ教の影響を想定しておられます。

このようにウイグル仏教は、時代性と地域性による影響を蒙りながら、あるいはシャーマニズム、マニ教、ネストリウス派キリスト教などの異文化・異宗教と交流しながら独自の展開をみせていきます。遊牧民のもつ資質によるものなのかどうかわかりませんが、宗教に対する柔軟な姿勢が生み出した多様な仏教文化は、東トルキスタンの仏教の特性を凝縮したといっても過言ではありません。ウイグル仏教を研究することが、トカラ仏教、中国仏教、チベット仏教、モンゴル仏教の解明にも寄与する、と考えられている理由がここにあります。

ところでマニ教や仏教は、いずれも遊牧民にとっては外来宗教です。それらがどういった過程を経て受容されたかを示唆する興味深い記録が残されています。1129年、宋の使節として金に派遣された洪皓は、当時燕山地方に滞在していたウイグル人たちの仏教

信仰について、次のように観察しています。

（ウイグル人は）仏教を信奉すること頗る厚い。ともにお堂を建てて、塑像の仏像を制作している。齋日には必ず羊を殺して酒宴をひらく。（羊の）血を指に付け、それを仏像の口に塗りつける。あるいはまた仏像の足に額をつけて泣く。彼らはこれを「親敬」と言っている。仏典を読誦する時には、袈裟を着てインドの言葉で読経している。

（『松漠紀聞』）

ウイグル人、ここではおそらく俗人だと思いますが、仏像の口に犠牲獣の血を塗ったというのも、遊牧民の間で行われていた祭天の儀礼に通ずるところがあるのかもしれません。仏教儀礼の在り方にシャーマニズムの要素が混入していたことは、大変興味深いと思います。そもそもウイグル語でブッダ・仏を示す言葉は、「ブルハン burxan」です。これは中国語の「仏」の音写である bur に、「王、酋長」を意味する xan を付加してできた言葉です。さらに「仏」の前には必ず「天中の天 tängri tängrisi」というエピテートが付加されます。ウイグル人たちは、彼らが崇拝の対象としていた「天」を通じて「仏」という存在を理解していたのかも知れません。

多様なウイグル仏教にあって、その黎明期から衰退期まで一貫して彼らの信仰を集めていたのが弥勒（仏・菩薩）です。すでにトカラ仏教では弥勒信仰が盛んでした。その影響を受けたウイグル仏教で弥勒信仰が受容されたことは自然なりゆきと思われます。さらに言えば、我々の世界の上にあるとされる「トゥシタ天（兜率天）」が、ブッダの場合と同じように、「テングリ（天）」と同一視された可能性もあるのではないでしょうか。この場合、トゥシタ天を住処とする弥勒菩薩に、ウイグル人たちは非常な親しみをもったに違いありません。

ウイグル人たちの弥勒信仰は、もっぱらウイグル語に翻訳された経典やその識語に吐露されています。これまでに報告されている弥勒の名があらわれるウイグル仏典と識語は、ベルリン・ブランデンブルグ科学アカデミーの笠井幸代氏や敦煌研究院の楊富学氏によってまとめてられているので、それらに依拠しながら、上生信仰（此土での命を全うした弥勒が諸天に教えを説いている兜率天に死後再生したいと願う信仰）と、下生信仰（兜率天での命を全うした後、此土に生まれて覚りを開き、衆生を済度する弥勒仏に対する信仰）を示す諸事例を見ていきたいと思います。

1)　下生信仰を示す資料

a.『マイトリシミット』（*Maitrisimit nom bitig*、弥勒との邂逅）

マイトリシミットは、将来仏としての弥勒と邂逅することをテーマとする仏教戯曲です。序章と 27 章からなる。奥書には、アールヤチャンドラ菩薩がインドの言葉からトカラ語 A（カラシャール方言）に作り（yaratmıš）、そこからプラジュニャーラクシタ羯磨師がチュルクの言葉に翻訳した（ävirmiš）、と記されています。トカラ語 A の写本が発見

されておりまして、その原題は *Maitreyasamiti-nāṭaka* です。現在、この両テキストの比較研究が、トカラ語とウイグル語の研究者により進められています。

ウイグル語本にはセンギム本、ムルトゥク本、ハミ本が知られており、特にハミ本は1067 年の書写であることがわかる点で非常に貴重な資料です。ハミ本の奥書には、経典内容に即して将来下生する弥勒との出会いが願われています。

わたくしこと、三宝を信ずる優婆塞チュウ・タシュ・イゲン・トトクは、我が妻とともに、将来仏たる弥勒仏に邂逅しますように、と願って弥勒像を描かせ、この「弥勒との邂逅」という経典一部を書写させました。先ず、この造像と写経の善業功徳を上なる梵天・帝釈天・四天王に回向いたします。この功徳によって彼らがその威神力を増大させ、この国と都城とを守護してくださいますように。

b. 棒杭文書

ドイツの探検隊がトルファンの高昌故城 α 寺院跡から出土した棒杭文書には、現在ところ三種類（そのうち一件は漢文）が知られています。一つは α 寺院跡の床面中央に泥に塗り込められたまま土台のレンガ積みにしっかりと突き刺さっていたそうです。先端が尖った長さ 84cm の八角錐状の棒杭は、その銘文の内容分析から、1008 年に建造された寺院建造にあたって打ち込まれた「刹」であることが森安孝夫先生により明らかにされています。また棒杭文書にその名がみえるカルヤーナバドラは『マイトリシミット』の奥書に現れる同名の僧侶と同一視されています。

我々二人は平等心となって、この寺院を建てるために刹の杭を打ち立てて奉納した。願わくは、この功徳の力によって、後に弥勒仏と邂逅しますように。願わくは、私たちが弥勒仏から仏の慈悲によって、仏となる予言（授記）を得ることができますように。この予言の力によって永劫の間、三阿僧祇劫にわたって六波羅蜜を完成した後、私たちは仏の国土に姿を現しますように。

また、漢文で書写された棒杭にも、「・・・不失善心。憶念之意。引将弥勒下生之時。弥勒會・・・」とあります。読み方には未解決の部分が残っていますが、ここでもウイグル語の棒杭文書と同じように弥勒の下生が待望されています。

このように『マイトリシミット』と棒杭文書は、両者とも書写された年代がはっきりとわかる点で非常に貴重である。書写された 11 世紀の初頭（1008 年、1064 年）には、トカラ仏教の影響から下生信仰が盛んであったことを示しています。

2) 上生信仰を示す資料

a. 上生経変相図

中国社会科学院考古研究所によって 1979～1980 年にかけて吉木薩爾（ジムサール）県に位置するいわゆる北庭高昌回鶻仏寺の発掘が行われました。寺院は 70.5m×43.8m の長方形をしており、二層が現存しています。その東面の E 204 窟に交脚の弥勒菩薩の塑像と壁面に『観弥勒菩薩上生兜率天経』を題材とする「上生経変相図」が発見されました。壁画の作成年代は、炭素年代測定により、10 世紀中葉～13 世紀中葉とみられています。壁画の表現は「上生経」にみえる次のようなトゥシタ天の表現とよく一致しています。

・・・一一宮に七宝七重の垣あり、七宝光明の中、蓮華を生じ、蓮華七宝行樹を生じ、次第次第に宝女妙音楽等を生ず。龍王ありてこの垣をめぐり、雨を降らすときには垣上を荘厳し、自然に風あってこの樹を吹き、樹振動して空・無常・無我・諸波羅蜜の法を説く。龍王またその額よりして宝珠を出し、四十九重微妙の宝宮と化し、また天子天女七宝蓮華諸楽器を生じ、楽起こり天女起って舞う。歌音十善四弘誓願を演説し、諸天聞くもの皆無上道心を発す。園中には八色の宝珠合成の瑠璃渠あり。一一の渠中に八味の水あり、水中には七宝の蓮華あり、華の上には二十四天女現じ、各手に楽器を持し、菩薩の六波羅蜜を賛嘆す。また園には七宝の大師子座あり、宮の四方には四宝の柱あり、柱上に楼閣あり、天女その中に住し、妙法を説くこと前と同じ。・・・



b. インサディ・スートラ　Insadi-Sūtra

「インサディ・スートラ」とは、①自恣に関する漢文仏典を引用しつつ編集された詩節、②頭韻詩の弥勒讃、③「上生礼」、といういくつかのテーマからなる、ウイグル人によって編集・著述された仏教アンソロジーです。しかし実際には、①「自恣」の部分だけがインサディ・スートラと呼称されていることには、あまり注意が払われていません。②の「弥勒賛」では『観弥勒菩薩上生兜率天経』の経文をウイグル文頭韻詩に独自に改編していることが報告されております。そして③は敦煌資料にみえる礼懺文である「上生礼」（S. 5433、S. 4451、P. 3840）の陀羅尼部分をウイグル文字で音写しています。「上生礼」もやはり「往生兜率内院」を欣求して禮懺儀礼に用いられたテキストです。

c. ウイグル人が書写した漢字資料から

トルファン出土資料には多くの版本資料が含まれています。例えば契丹大蔵経もその一つです。紙は当時も大変貴重なものでしたので、ウイグル人たちは、こういった契丹大蔵経を再利用して裏面にウイグル文を書いたりしています。なかにはウイグル人が書

写した漢字資料も残されています。断片的に残されたウイグル人が書写した漢字資料をジグソーパズルのように復元したところ、これが「弥勒啓請礼」と呼ばれる礼懺文であることが判明しました。さきほどご説明しました「上生礼」と同じく上生を願う内容を持っています。これらの資料は、ウイグル人たちが漢字を音読して礼懺を行っていたことを示しています。しかし現在の日本の読経がそうであるように、漢字音からでは、その意味を理解することはできなかっただろうと思います。ですから彼らはその内容をきちんと把握するためにウイグル語に翻訳することも怠ってはいませんでした。実際に「弥勒啓請礼」をウイグル語に翻訳したものも発見されています。

3）下生から上生へ

以上の資料をまとめますと、西ウイグル国の弥勒信仰は、「下生信仰」はトカラ仏教から、そして「上生信仰」は中国仏教から影響を受けたものとみることができるようです。また「下生信仰」が 11 世紀の文献に集中し、「下生信仰」が中期から後期の文献に多くみられることは、トカラ仏教から中国仏教へとシフトしていくウイグル仏教の姿を反映しているのではないでしょうか。

「上生信仰」が盛んになっていく要因につきまして、笠井幸代氏は、8 世紀から 9 世紀にかけて曇曠によって敦煌に伝えられ、さらにチベット期に活躍した法成（チェードゥプ）に継承されて隆盛をみた法相宗がトルファン地域へも波及していったのではないかと想定されています。

この他にも、ツィーメ氏が提示したウイグル語『慈恩伝』の翻訳例は重要です。『慈恩伝』は、10 世紀末から 11 世紀初頭にかけて活躍したウイグル僧シンコ＝シェリ＝トトゥング（勝光闍梨都統）によってウイグル語へと翻訳されました。『慈恩伝』本文で玄奘が病床にあって、傍らで看病していた者に伝えたという偈頌「南無彌勒如來所居内衆。願捨命已必生其中」は、ウイグル本では「弥勒如来に帰依いたします。その宮殿にいる内衆に達することを願います。このわが身を捨てた時に、彼らの間に疑い無く生まれますように」と正しく翻訳されています。しかしそのあとに続く文章では、漢文は「寺主慧徳、又夢に千躯の金像が東方より来下して翻經院に入り、香花空を満たすを見る」となっているのに対しウイグル語では、これに加えて「西北の方角の道を開く」という漢文原典にはない文言が付加されている。ツィーメ氏は、釋道安（314~385 年）の伝記にも西北方の道が開いて、兜率天を見たという表現と一致することを指摘し、ウイグル語『慈恩伝』では願兜率往生者としての玄奘が強調されているとみたのではないかと考えておられます。

道安はいつも弟子の法遇たちと弥勒菩薩の前で誓いを立て、兜率天に生まれんことを願った。その後、前秦の建元二十一年（385）正月二十七日に至って、突然、姿のとてもみすぼらしい異形の僧が寺にやって来て宿を借り、寺房が狭いので講堂におらせた。その時、維那が仏殿で当直していたが、夜中にこの僧が窓の隙間から出入りしているのを目にし、慌ててそのことを道安に報告した。道安は驚いて起き上がって挨拶をし、来意

をたずねたところ、「そなたのためにやって来たのだ」と答えた。道安が「自ら思いまするに罪業は深く、どうして解脱できましょうか」と言うと、「解脱するのは簡単だ。だがあらためて聖僧を沐浴させる必要がある。そうすれば願いはきっと果たされよう」と答えたうえ、沐浴の方法を具体的に教示した。道安は来生に赴くところをたずね、その人がそこで天の西北の方角を手でぱっと払うとただちに雲が開けるのが見え、兜率天のとても素晴らしい果報をまざまざと目にした。(『高僧伝』巻五、吉川忠夫・船山徹訳)

先行研究の成果に依拠しながら、西ウイグル国の弥勒信仰の変遷をみてきたわけですが、ウイグル語の仏教文献のなかには、玄奘の高足である慈恩大師基の『観弥勒菩薩上生兜率天経賛』のように、法相宗の立場から上生経を解釈した注釈書からの引用文もございます。しかしこのように高度に哲学的な思想が、果たしてどこまでウイグル人に理解されたのかは明らかになっておりません。同じように敦煌における敦煌の法相宗の影響を受けた上生信仰も正確な教学理解に基づいたものというよりも、漠北時代から引き継がれてきた「テングリ（天)」信仰と兜率天を住処とする弥勒への信仰とがミックスしたものではないかと考えております。

最後に、ウイグル人仏教徒は、当初トカラ仏教の影響で下生信仰であったようですが、しだいに上生信仰へと移行していきます。そのきっかけとなったのは、すでに早い時期から法相宗が伝播していたトルファン仏教社会では、これにはウイグル人も漢人も含めますが、実際にトルファンにも滞在し「仁王経」を講義したことのある、また願兜率往生者であった玄奘に対する思慕の念であったのではないかと推測しているところでございます。

三谷：　橘堂先生、どうもありがとうございました。

事務連絡をさせていただきます。最初に申し上げましたように、それぞれの先生方に対する質問がございましたら、配布いたしております用紙にお書きになってください。そして一番後ろにお茶のコーナーを用意しておりますが、その横に回収箱を置いておりますので、その中に入れてください。また係の者も回収に回ります。
それから、受付のところで配布いたしましたが、今年の 4 月 5 日に龍谷ミュージアムがいよいよオープンいたします。そこで宮治先生の方からご案内をしていただければと思います。

宮治:　龍谷ミュージアムのお知らせをさせていただきます。入澤先生が副館長、私が館長を務めておりますが、4 月 5 日に龍谷ミュージアムが開館します。ミュージアムのスタッフ一同、現在開館の準備に追われています。西本願寺の向かい側に、3 階建ての立派な建物が建てられまして、龍谷大学の仏教総合博物館となります。2 階と 3 階に展示室があり、2 階の展示室にはアジアの仏教、3 階の展示室には日本の仏教を展示しまして、インドから日本までの仏教の変遷、展開を多くの方々にご覧いただきたく思っています。今年は「釈尊と親鸞」というテーマで 1 年間開催いたします。しかし、1 年間同じものを展示するというわけではなくて、展示替えをいたします。アジアの仏教は釈尊というテーマで、特にインド、ガンダーラ、西域辺りを中心に、釈尊の生涯、そして教えがどう伝わり、展開していったかということを展示します。日本の仏教の方は、今回特に親鸞聖人と真宗の歴史に焦点を当てた展示をいたします。日本の方は 6 期に分けて展示替えをし、100 カ所以上の寺院や博物館などから多くの貴重な法宝物を借用して、展示をします。関連する図書・図録等の刊行の準備を進めています。是非ご来館いただければと思います。よろしくお願いします。